

観光産業は、経済の重要な柱の一つであり、多くの地域経済にとって欠かせない存在である。そして、この産業は昨今のパンデミックの影響により大きな打撃を受けたが、コロナ禍明けの23年にはコロナ前19年の水準まで回復した。たとえば、日本人延べ宿泊者数は19年の4億8027万人泊に対して23年は4億7842万人泊とほぼ同水準まで回復した(観光庁「宿泊旅行統計調査」)。また、インバウンドによる訪日外国人旅行消費額は19年の4兆8,135億円に対して23年は5兆3,065億円と、コロナ前を10.2%上回る水準で推移している(観光庁「訪日外国人消費動向調査」)。

観光産業が回復したことは良いことだが、これまでと同じように単にインバウンドを中心とした集客を増やしていくべきかを問われると、コロナ禍の経験を生かした新たな観光産業の可能性を踏まえた戦略の必要性も見えてくる。

コロナ禍において観光客は、「人が集中しないことによる利点」を体感した。たとえば、ホテルが空いていると、人の声に遮られて以前は気付かなかった、ホテル

の風格と調和したBGMが耳に入ったことで、これまで感じることもないゆったりとした空気を感じ、その空気感のもとで新たな「おもてなしの心」を体感できた。また、多くの神社仏閣や景勝地では、混雑している時には感じることもなかった静寂の中にある神秘の世界を感じられたし、人混みに遮られることのない大自然的な景色をゆったりと満喫できた。同時に、観光地周辺の地元住民も、渋滞のないストレスで不便のない生活も感じられたことだろう。

観光は、地域経済にも、地域雇用にも、外貨獲得にも大切だが、コロナ禍の経験は、ひとりでも多くの観光客を呼び込むことが主流であった観光産業のあり方に、地域にも自然にも優しい形で観光客を呼び込む未来の観光産業のあり方という選択肢を強く認識させてくれた。ここからの学びは、地元 に不便を与えず、人混みに埋もれていた観光資源を再発見できる新たなツーリズムの可能性だ。

やみくもに集客だけを追い求めれば、限られた滞在時間で周辺の観光地を一カ所でも多く周ろうとするこ

観光地を満喫しきれないという昔の姿に戻ってしまう。しかしながら、観光産業が集客数をコントロールしたり、宿泊施設が従来の1泊2日主流ではなく2泊3日に誘導する仕掛けを整備したりできれば、1日の集客人数にゆとりを持たせながら1年を通して集客することができると。そうすることで、混雑を避けられると同時に、ゆったりとした時間が流れてこそ再発見できる新たな観光資源の魅力も発揮し続けることが可能となる。

さらにこの選択肢は、「宿泊需要はあっても、スタッフが足らず7割から8割の宿泊者数しか受け入れられない」といった人手不足に悩む宿泊業者の課題解決にもつながるはずだ。

観光客の満足度を高め、観光産業を盛り立てるだけでなく、地元と観光客、観光産業の3者の幸せを追求した結果として生み出す地域観光のあり方は、未来の観光産業が選択すべき道の一つになるだろう。